

桜蔭俳話会 十月句会 (第三一九回)

平成二十五年十月二十日(日)

会場・旭区民文化センター(サンハート)

4点①ちぐはぐなははとの会話青蜜柑

秀一

※赤々と祖父のお墓の曼珠沙華

邦子

①引き合いて秋の声聴く糸電話

幸

色深き幹の真中や天高し

麻衣

3点①燐寸箱朝顔の種納めけり

秀一

空は澄み陽は強けれど風は秋

邦子

①落ちてゐるやんまの翅のふるへかな

麻衣

芒の穂さざ波寄せし池の岸

ツル子

①細胞の六〇兆個そぞろ寒

麻衣

何思ふ我に蠶螂立ち向かひ

ツル子

吹き返す風の下手に野紺菊

明美

木洩れ日にどんぐり三つ並びをり

ヤエ子

雨に濡れ光の波の草もみぢ

守

数珠玉をとりし記憶や夢の中

ヤエ子

2点②芒挿す一升瓶の店に入る

ツル子

木犀の香に歩ゆるめ通りけり

邦子

①秋灯や向かひの席に置く靴

麻衣

吟行の朝の雨音そぞろ寒

守

祖谷溪の音の一つに秋の風

守

かつこうと鳴る信号機実紫

清子

こはごはとひよこ抱く児や天高し

友子

金木犀カレーの匂ひの漂へり

ヤエ子

秋茜群れをばづれし自在かな

友子

やれやれと休む間もなしました台風

邦子

猫へ乳鳥に米撒く秋日かな

秀一

膝つきでどんぐり一つ拾ひけり

明美

小鳥来るレストハウスの木椅子かな

明美

秋の雨しとど畠山地蔵尊

守

健脚の昔のありし赤とんぼ

幸

遠嶺に点と消え行く雁の列

幸

同病を励まし合ひぬ敬老日

清子

師の句碑へ日の及びきし小鳥来る

清子

(不在投句 古野明美、原田清子)

マンシヨンの暗証ボタン柘榴熟る

秀一

日時計の影くつきりと運動会

友子

1点①うねる波赤青緑の運動会

幸

〔事務局よりお知らせ〕

① 十一月句会は吟行会となります。

園芸店に思ひのままの秋の蝶

清子

十一月二十三日(土)、こども自然公園(旭区)

自転車の生徒の胸に赤い羽根

邦子

集合 相鉄線・二俣川駅改札口、十時。

何にでも縋りて葛の葉果てもなし

ヤエ子

(十月の吟行は、大雨のため中止。急遽、定例

横浜の秋風強く迎へらる

麻衣

の句会としました)

十三夜酔李白の凶吊しけり

秀一

東天紅ひと声高き秋の空

ツル子

② 十二月の定例会句会

秋冷の雨の匂ひの信濃かな

守

・日時 十二月二十三日(月) 午後一時三十分

黄落期清掃員のみな寡黙

明美

・場所 旭区民文化センター・サンハート

読み返す母の歌集や秋夜長

幸

ままごとも遠き日となりたでの花

友子

合掌の大屋根小屋根草の実飛ぶ

幸

日時計の陰も細まり秋の蝶

ツル子

降るやうに森の木霊や秋澄めり

明美

池の端の木々より染まる初紅葉

友子

野分晴箒一斉出動す

ヤエ子